

ホトトギス

昭和二十六年三月二十七日発行  
明治三十九年三月十日創刊  
養老館発行  
昭和二十六年三月二十七日発行  
昭和二十六年三月二十七日発行

# ホトトギス

十二月号



## 俳句随想 〔三百六〕

汀子

厳しい残暑が続く秋。彼岸が来れば涼しくなるであろうかと期待する。台風も早々と日本列島を脅かし、それに伴う大雨による水害はとどまるところを知らない。世界もおかしい。大きな地震が起つたり旱魃が続いたり、地球は病んでるのであるうか。こんな時、自然と共に生きている我我はどのようなことが出来るであろうか。少なくとも地球を脅かす自然の姿を俳句にしっかりと捉えていくことは出来る筈である。我が家の庭の合歓の木は秋になつても毎朝花を咲かせている。芒が青々として葉が伸び穂がなかなか出てこない。

目の前の自然の草や木々の異変はすぐに分る。この合歓の花は返り花と詠んだらいいだろうか、と俳句会の時に質問を受けた。

返り花となると冬十一月の季題である。しかしそのように思ったら作って見てもいいと返事をした。「仲秋のまぼろしならぬ合歓の庭」という句が廻ってきた。随分苦勞して作られたであろう跡が想像されて、私はためらわず特選に選んだ。後の世の人がこの句を見れば今の状態を理解してくれるのではなからうかと思う。

# 句日記 汀子

平成十八年十二月二日 芦屋ホトトギス会

時雨ると告げて遅れて合流す  
ひそめたる命冬芽の所在はも  
枯色に近づく庭の落葉かな

十二月三日 関西野分会

もう会へぬことは現実日記果つ  
快晴の中の悲しみ冬の星  
初雪の便りの中に偲びけり  
悲しみの眞は白紙日記果つ

十二月三日 下萌句会

冬帝や大地とことん晴れし日よ  
この落葉尽くす日を待ち掃くこと  
久闊といふは寒さを寄せつげず  
邂逅の納め句座とはなりにけり  
菓の暗く森深く踏み入りぬ

十二月四日 ロイヤル俳壇

枯葉いま風に従ふ軽さかな  
障子閉め落着く時間ありにけり  
水ここで地下にもぐりぬ冬の川  
一面の枯葉を置ける庭木かな  
ふり返る月日またたく間の師走

十二月五日 有恒倶楽部

霜枯の大地に星の降る夜かな  
庭といふ隠れ家めきて冬の蝶

不意の客短日さらに消えゆけり  
予定はや崩れることも師走かな  
霜枯のものなほざりにある狭庭

十二月五日 無名会

六甲は見なれてをりし冬の山  
オリオンの所在確かめ冬山路  
笹鳴やふと考への躓きぬ  
冬山としてわが街の山として  
ただそこにあるといふだけ冬の山  
笹鳴の来てゐる庭と知らされし  
もう昏れて冬山裾の火の点る

十二月五日 関西伝統俳句協会忘年会

短日の時間は別に動きをり  
忘年会兼ねし会議の早かりし

十二月八日 工業倶楽部

雲重き冬空抜けし旅路かな  
毛皮着て心を見せぬ女かな  
出先あり毛皮は置いて行くことに  
東京へつなぎて冬の空の旅

十二月十二日 大阪倶楽部

朝の間の冬霞抜けゆく旅路  
水鳥に朝はじまつてをりにけり  
人悼み人なつかしみ冬の朝  
冬ざれの大地安らぐ日々となる  
冷たき手引かれ壇上より悼む  
昨日晴今日は冷たき雨となる

十二月十二日 綿業倶楽部

初雪のみちのくいかに人悼む  
山頂に來し初雪と聞きしのみ  
そののちのことを語りて寒からず

十二月十四日 清交社

街師走運転免許更新す  
日向ぼこしてゐる如き待ち合はせ  
掃かれずにをれぬ落葉を掃くことに  
笹鳴の来てゐる辺り人の声  
欠席の多き師走の会となる  
笹鳴の所在明かさぬ葉ずれかな  
本當の師走まだ先稿を継ぐ

十二月十五日 時雨会

炭つぎし父のこだはりなつかしく  
山と海つなぐ芦屋の冬の川  
一步入るより炭匂ふ草の庵  
冬の川水の起伏のつながらず  
夜空晴れ冬の星座に心置く  
流星も冬の夜空を飾るもの

十二月十七日 野分会

東京に冬の星なき夜を泊つる  
書きつづけ句読点なき日記果つ

十二月二十日 夏潮句会

たちまちに遠ざかる日々年の暮  
今年ほど人惜み年惜みたる  
意に染まぬ仕事済ませて師走かな  
あや芒だけは刈られずありしこと  
冬ぬくしとは誰彼の挨拶に  
鯨見し大海原の孤独かな

# 廣太郎句帳

廣太郎

平成十八年十二月一日 六甲会

冬帝に空鋭角となつてゐし  
水鳥に水惑星の動き初む  
冬帝に夕日すとんと従へり  
有情とも無情とも水鳥の湖  
水鳥に迷犬ロンの構へかな  
水鳥の見えて見えざる水の綺羅  
冬帝に俳磚千基動かざる  
冬帝に凜と稲畑汀子邸  
水鳥にセツター犬といふ運命  
十二月一日 虚子館投句  
冬紅葉とはさらさらとからからと  
十二月二日、三日 岡山開巻会  
片時雨雲の変幻ありにけり  
風巻いてまいて落葉を舞はせたる  
一塊の膨れて時雨雲となる  
住職の話小春を引き寄せて  
枯蔦に日裏日表ありにけり

アイビー館どこを向いてもクリスマス  
遠山に時雨雲育ちつつあり  
十二月七日 蕉心会忘年会

竈猫あんたそれでも男なの  
大川に冬日散らしてしまひしか  
大雪の威は大川を寡黙にす  
流れにも師走の焦りありにけり  
冬うらら長蛇の列の洋食屋  
都鳥白く川鶺は黒く寝る  
蕉像の冷たく日差拒みをり  
喪心といふ艶放ち青木の実  
十二月八日 一水会  
鮪つてそんなに旨いもんやろか  
飛竜頭を頼むことよりおでん酒

十二月九日 日本伝統俳句協会神奈川・東京合同部会  
工作船冷たく錆びてをりにけり  
漱石忌横浜の猫踏んぢやつた  
銀杏散るこの雨にこの風にかな  
赤煉瓦倉庫要塞めく師走  
港町てふ華やぎに銀杏散る  
十二月十一日 朝日カルチャー若草句会  
冬の日を使ひ切つたる団地妻  
襟巻の狸妖しく睨みをり  
冬日影だけは八頭身であり  
冬の日を弾き返して摩天楼

十二月十四日 土筆会忘年会

枇杷咲いて忌中札貼る家であり  
雪囲して松の威の失せにけり  
十二月十九日 草木瓜会忘年会

湯ざめして世間を遠くしてをりぬ  
湯ざめして君の星見る空であり  
牡蠣打を拒む荒磯でありにけり  
牡蠣船と大和出航せし港  
十二月二十一日 登高会忘年会

百八で足らぬ煩惱除夜の鐘  
又若き魂召され菊枯るる  
嵩といふ命を秘めて菊枯るる  
十二月二十六日 若水句会忘年会

水鳥に湖北里山従へり  
聖変化ポインセチアの色に映え  
上を向いて歩かうよ歳晩だから  
聖歌今グロリアポインセチア燃ゆ  
歳晩の顔を詰め込むメトロかな  
十二月二十七日 目黒学園句会  
曆壳虚子の頁を先づ開き  
息白く午前様なる言ひ訳を  
曆壳花鳥諷詠説きもして  
仮名の如白壁に蔦枯れてをり  
嘘言へばいよいよ息の白くなり  
甲子園球場凜と蔦枯るる

# 雑詠 廣太郎 選

病む父の三匙の食事梅雨深し 八王子 栗林真知子  
 父の髭剃るも看病籠枕 同  
 病室の父への思ひ遠花火 同  
 泳ぐ子を絶えず数へてプール番 同 原三猿子  
 露の世といふに永らへゐる身かな 同  
 サングラス取ればやさしき顔なるに 同  
 羅に月光を波打たせをり 神戸 山田弘子  
 羅を着て色恋の沙汰もなし 同  
 泊船の灯の濁れゐる雷雨かな 同  
 籐寝椅子星座の中に眠りみし 福山 竹下陶子  
 星空へのぼり消えたる蛍あり 同  
 とんぼうの飛びとどまりて玉となる 同  
 句碑涼し建ちたる処また涼し 八尾 岩垣子鹿  
 冷酒でなくてはならぬ話なり 同  
 六尺のベンチに足りて三尺寝 同  
 かなかなや暮れゆく空の青きまま 榎原 稲岡 長  
 盆の月よければ少し淋しかり 同  
 蛸のよく鳴く丹波山まるし 同

七月や下品の白寿とはなりし 浅井青陽子  
 庭の草引いて用なくなりしこと 同  
 細帯をくるりと捲きし藍浴衣 同  
 白き鯉梅雨の濁りを背負ひけり 東温 高石幸平  
 紫陽花の紫微妙青微妙 同  
 太陽と風と薔薇と一詩人 同  
 町を出て爪先上り夕遍路 徳島 上崎暮潮  
 緑蔭を吹き渡る風吾も花鳥 同  
 紫陽花の彩の逢魔が時となる 同  
 日本の風の生まるる青田かな 東京 内藤呈念  
 道よぎる蛇には蛇の都合あり 同  
 知恵伊豆の墓所に発する蟻の道 同  
 梅雨はげし草のごとくに人濡るる 熊本 岩岡中正  
 梅雨の蝶よりもひそかに籠りゐる 同  
 靴はもの思ふかたちに梅雨深し 同  
 毎日を咲いてハイビスカスである 熱海 嶋田一步  
 山百合やまだ山歩きできしこと 同  
 点と色消して天道虫のとぶ 同  
 よくぞ実となりし緑のレモンちび 同 嶋田摩耶子  
 樹のレモン緑の時代長かりし 同  
 買ひもののドライブ道は盆ラッシュ 同  
 明易の鯉より動きはじめけり 相模原 木村享史  
 海よりも空よりも富士明易し 同  
 明易の富士に占ふけふのこと 同

## 雑詠句評（十一月号より）

千鶴子・美 奇・葉

静 龍・憲 明・芳 子

保 佳・むつみ・眞理子

中 正・とほ歩・廣太郎

薔薇といふ漢字が好きで薔薇咲かせ 熱海 嶋田 一步

薔薇という字はむつかしい。でも一度覚えると決して忘れない。

作者は長年北海道に在り、現在は熱海の高級マンションに、愛妻で俳人の摩耶子氏と共に悠々自適の日を送っているが、その周辺には常に薔薇にふさわしいリッチな雰囲気漂っている。古い付き合いだ昔からそう感じていた。

掲句、中七の「で」は「だから」という理由づけの意味ではなく、軽い切れ。薔薇という漢字が好きなの、そして薔薇を咲かせている人、そういう句だと思ふ。それは知人でも自分でもかまわない。やや知の勝った句であるが、薔薇という季節は見事に生きている。（千鶴子）

書くのが難しい漢字の代表のように言われている「薔薇」である。パソコンでは苦も無く打ち出せるが、いざ手書きとなるといささか覚えるのに苦労する。でもこう詠まれると、確かにこの漢字は、見ているとこの花の特徴を言い当てており、何とも優美なこの花が見えてくる。（廣太郎）

さう言はれても暑し暑がり屋には 八尾 岩垣子鹿

この夏は何と言う暑さであろうか。

「今日は風があるからまだいいよ」とでも言われたのか「心頭を滅却すれば火もまた涼し」などと言われたか……でも暑さを普通以上、人以上に感じる者にとって、暑いのは暑いのだ。

会話の前半をいろいろ想像させ、「暑がり屋」の為人から後半の話題の発展までも考えさせられる句。「暑し」「暑がり」「暑」を重ねたことも素晴らしい。（美奇）

筆者は実感として嬉しい程共感する句である。毎年夏の暑さは増すばかりであり、平成十九年は何か観測史上最高の気温を観測したと聞く。作者に負けない程「暑がり屋」であろう筆者は毎年この時期戦々恐々としているのである。季節が正に真に迫っていると感ずるのは筆者だけだろうか。（廣太郎）（以下略）

天地有情

子選

イタリアンパセリも花となれば供華 熱海 嶋田摩耶子  
 父母好きでありし蚊帳吊草も供華 同  
 夏炉守る老のゆらりと居眠れる 相模原 木村享史  
 夏炉辺に虚子の話をせがまれて 同  
 街の香の土の香となり雷雨去る 宝塚 水田むつみ  
 雷雨より一足先に着きし宿 同  
 黒南風を従へ五百キロの旅 東京 稲畑廣太郎  
 丸ビルもマルビルも黒南風に黙 同  
 人通りなき古町のつばくらめ たつの 浅井青陽子  
 旅の人めづらしがりし茅の輪かな 同  
 パナマ被てインカのこと知らねども 神戸 後藤比奈夫  
 竹夫人竹は固しと思ひつつ 同  
 星月夜微光を返す屋根瓦 樫原 稲岡 長  
 百枚田吹く風白し稲の花 同  
 蟬の声彼の世此の世の打混り 豊中 瀧 青佳  
 梅雨が洗ひ風が洗ひし夕日かな 同  
 初蟬を誘ひ出したる日輪よ 神戸 山田弘子  
 星空の下りて来たりし月見草 同

夏蝶の風追ひ越してゆきにけり 熊本 岩岡中正  
 嬰すでに少年のかほ雲の峰 同  
 二の滝へ急がぬ水の青さかな 島原 平尾圭太  
 滝壺に手話の一団ありにけり 同  
 虚子館を訪ふ旅発ちや明易し 長岡 安原 葉  
 梅雨晴の風抜けてゆく庭つづき 同  
 虹消えてふと夕風のみほとりに 神戸 長山あや  
 葉は眠り花合歓へ星降りて来る 同  
 荃立ちて不易流行ありにけり 福山 竹下陶子  
 杖ついて花に來給ふころざし 同  
 愛憎に遠のく齡ほととぎす 徳島 上崎暮潮  
 生続けたしほととぎす聞かため 同  
 糸とんぼ草より細く翔ちにけり 鹿児島 坂口麻呂  
 水の面の色より離れ川とんぼ 同  
 庭中のくちなし母の枕花 東京 田治 紫  
 星々の潤む短夜なりしかな 同  
 山梔子の花に送られ迎へられ 同  
 梅雨もまた神の恵みとうべなへり 同 桑野英彦

# 天地有情句評

汀子

人通りなき古町のつばくらめ たつの 浅井青陽子

たつの町の町らしい趣を描いて妙。

竹夫人竹は固しと思ひつつ 神戸 後藤比奈夫

暑い夜は寝苦しい。竹夫人をユーモラスに描いた秀句。

星月夜微光を返す屋根瓦 榎原 稲岡 長

星の光にも応える屋根瓦の存在。

蟬の声彼の世此の世の打混り 豊中 瀧 青佳

蟬時雨を聞きながら懐古の情に誘われて行く作者。

星空の下りて来たりし月見草 神戸 山田弘子

夜を咲く月見草の背景が描けた。

嬰すでに少年のかほ雲の峰 熊本 岩岡中正

みどり児に少年の顔を見た喜び。

イタリアンパセリも花となれば供華 熱海 嶋田摩耶子

イタリアンパセリの藁が立ち美しい花を咲かせた。それを供華

とした作者の詩心。

夏炉守る老のゆらりと居眠れる 相模原 木村享史

ゆらりと居眠りという表現は夏炉ならではと思える。

雷雨より一足先に着きし宿 宝塚 水田むつみ

間一髪雷雨から逃れた安堵。

黒南風を従へ五百キロの旅 東京 稲畑廣太郎

旅先へ追いかけてくる梅雨の南風。五百キロは東京から大阪？